

論文要旨
Summary of Dissertation

2020年12月21日

Date (YYYY-MM-DD):2020-12-21

専攻 Department	都市イノベーション学府
氏名 Name	福尾匠
論文題目 Title	ドゥルーズの非美学：哲学と実践
和訳または英訳 Translation (J->E, or E->J)	Deleuze's Anesthetics: Philosophy and Practice
<p>本論文はジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) の哲学を、その実践性、そして芸術との関係というふたつの観点から研究する。このふたつの観定の相互前提的な関係がどのように構築されるのかということをはらかにすることが論文全体の目的だ。</p> <p>ドゥルーズは哲学を、概念を創造する実践だとしている。創造することが変化をもたらすことであるなら、哲学はおのれの実践と変化をポジティブに結びつける内的な論理を必要とするだろう。</p> <p>また、ドゥルーズは異質な実践の複数性が創造に意味を与えるとも述べている。もとより創造が普遍的であるなら実践の必要はなく、したがって創造こそがカント的な意味での〈批判〉の対象にならなければならないだろう。本論文のタイトルである「非美学 anesthétique」は、哲学というひとつの実践がおのれにとって〈非〉である芸術と、いかにしてそれぞれの自律性、互いの異質性を保ちながら創造的な関係を結ぶのかということをは考察するための仮説的な観点だ。</p> <p>本論文は哲学の変化のポジティビティと哲学にとっての他者のポジティビティ、つまり哲学の実践的な規定と他の実践の哲学的な規定の相互不可分性を明らかにすることを試みる。</p> <p>第1章から第5章までの各章はそれぞれ、能力、イメージ、体系、言語、人称性といった主題から、ドゥルーズにおける実践的なものの哲学的な規定と哲学の実践的な規定がどのような関係にあるのかということをは論じ、第6章でそれを非美学という概念のもとに編み上げることを試みる。</p> <p>第1章ではまず、『カントの批判哲学』でドゥルーズがカントの〈批判〉を諸能力の置換体系という観点から読解していることに着目し、それがどのように再構成されているのかということをは考察する。ドゥルーズは『差異と反復』で自身の能力論を立ち上げるにあたってカントを批判しているが、この批判がどこまで実効的なものなのか吟味さ</p>	

れる必要があるだろう。そして能力論における批判は、感性のアプリオリな形式を扱う「感性論」と美しいものの判断における構想力と悟性の協調を扱う「美学」へとカントがエスティックを分裂させたことへの批判と直結している。本章は『差異と反復』の能力論と美学＝感性論の統合がどのような関係にあり、それが十全にカントの乗り越えとして評価できるものなのか、問題があるとしたらそれはどのように規定できるのかという問いに答えることを試みる。

このときとりわけプロブレマティックなものとして現れてくるのは、『差異と反復』での、異質な感性と悟性を媒介する構想力 *imagination* の作用であるカントの「図式論」への両義的な態度であり、非美学という観点はこのドゥルーズ自身における葛藤を明確にし、本論文全体を通してそこに介入するために導入される。

第2章では『シネマ』2巻を取り上げ、本書の「イメージ *image*」概念がどのような実践的な価値をもつかということ考察する。ここで実践とは哲学が映画から新たな概念を引き出すことを意味するが、イメージという概念の規定がどのようにそれを可能にするかということ明らかにすることが本章の目的だ。そこで、ドゥルーズが依拠しているベルクソン『物質と記憶』のイメージについての議論と『シネマ』を比較し、何が引き継がれ何が引き伸ばされているか明らかにするとともに、エリー・デューリングのベルクソン論および映像論との対照を試みる。後者についてはとりわけ、『シネマ』における観客、あるいは観客としての哲学者の位置づけの特異性をあぶり出すことに寄与するだろう。そしてこの点がイメージ概念の実践性にどのように関わっているかということ論じる。

そしてここには感性＝芸術と思考＝哲学の図式ないし想像力 *imagination* を媒介とした協調というモデルに替えて、映画の思考と哲学の思考の干渉というモデルが現れており、続く第3,4章はこうしたモデルを可能にする哲学に内的な条件としての可変性、構築性を論じる。

第3章では「地層」という概念に着目し、『千のプラトー』のシステム論から『シネマ2』を経て『哲学とは何か』における哲学的体系の議論へと至る、この概念の変遷を跡づけることを試みる。この追跡によって明らかにしたいのは次のふたつのことだ。

第一に目指されるのは、『千のプラトー』における地層概念が本書のシステム論の中核をなすものであり、それが『哲学とは何か』における哲学的体系（＝内在平面）の歴史的な可変性と多元性のポジティブな規定へと流れ込んでいることを示すことだ。これは客観的な体系の動性を規定するために考案された概念が、おのれの実践における変化のポジティブ性の規定へと跳ね返っていることを示すものであり、ここには第2章におけるイメージ概念が映画のものから映画と哲学の関係へと跳ね返っていたのと類比的な運動が見て取れる。

そして第二に、『千のプラトー』の地層概念における「内容」と「表現」の二元性というアイデアが、人間的な地層における物的な「機械状アレンジメント」と言語的な

「言表行為の集合的アレンジメント」の二元性を可能にしておき、さらにそれが『シネマ 2』における視-聴覚的なイメージの議論に引き継がれていることを確認する。この二元性は時間イメージ的な思考の定義に関わると同時に、映画とそれを論じる『シネマ』との関係にも関わっており、ここでも第 2 章で扱った『シネマ』の実践的側面が別の角度から検討される。

第 4 章では『千のプラトー』の言語論と『哲学とは何か』における哲学的概念の構築主義的な規定の関係を論じる。前者における〈プラグマティック〉としての言語論をその実効性において捉えるために、本章では J. L. オースティンによって創始されオズワルド・デュークローによって言語学の領野で形式化された「言語行為論」の系譜のなかにこの議論を置きなす。それによって「指令語」や「非物体的変形」、そして「連続的変奏」といった『千のプラトー』の言語論を構成する重要概念がどのような実践的な射程をもつのか明確にすることができるだろう。

『哲学とは何か』でドゥルーズは哲学的概念を論理的な「命題 proposition」ではなく、言表行為に内属する「自己定立 auto-position」によって捉えているが、こうした哲学の構築主義的な規定は、言語のプラグマティックと直結している。本章では『千のプラトー』の言語論を手がかりにしつつ、哲学に固有の言表行為という観点から概念創造の実践性を明確にすることを目指す。

第 5 章ではドゥルーズが『哲学とは何か』で内在平面と概念—このふたつについてはそれぞれ第 3 章と第 4 章で取り上げている—に加えて、哲学の第三のエレメントとしている「概念的人物」が哲学的なテキストのなかで具体的にどのように編み出され、機能するのかということを検討する。それにあたってベルクソン『物質と記憶』の「イメージ」論をふたたび取り上げ、この議論において「私」という語がどのように用いられているのかという観点から読解する。本章で目指されるのは、この「私」がイメージ論という理論の内容を提示するにあたって用いられる修辞的な形式に留まるものではなく、イメージという概念の構築とそれに固有な哲学的な人称性の彫琢は不可分な関係にあるということだ。

そしてこうした読解は、特殊な言表行為としての哲学のありかた—それは哲学的言表を「パフォーマンス」として考えることすら棄却する—が具体的なテキストにおいてどのように作動するのかということをもひとつの事例において示すとともに、概念-内在平面-概念的人物といったエレメントがどのように接合されひとつの哲学を形作るのかという事例となるだろう。これは『哲学とは何か』における構築主義を、テキストの読解において実行 **implement** する試みでもある。

第 6 章ではここまでの各章で論じられてきたことを取り集めつつ、それを非美学という概念のもとにまとめ上げることを試みる。まず、第 1 章で提起された問いに応答するにあたって、ドゥルーズにおける諸能力の垂直的な階梯のモデルと、美学=感性論の統合という企図は分離可能だと想定し、両者を同居させるものを「真の美学」という名前

で呼びなおす。そしてこれが『差異と反復』だけでなく『意味の論理学』、『アンチ・オイディプス』、『感覚の論理学』、そして『シネマ 1』に共通する構造であり、これがなぜドゥルーズをカント的なものからの離脱を阻むのかということ論じる。

こうしたモデルに収まらないものとして、第 3 章で取り上げたような、内容と表現ないし物体と言語の水平的な二元論の特異性を、あらためてカントの乗り越えという観点から考察する。この二元性は教科書なドゥルーズ像におけるような潜在的なものと現働的なものの二元性ではなく、現働的なものうちにある異質なものの二元性であり、このとき潜在的なものはこの二元性を発生させるものとして現働的なものとの二元的な関係に入る。つまり潜在性-現働性と内容-表現のふたつの直交する二元性があると考えられるが、これをドゥルーズにおける二元論の恒常的な使用のなかに位置づけ、理念的な〈一元論=多元論〉を実現する実践的なモデルとして考える。

そして『哲学とは何か』における哲学と芸術それぞれの位置づけをこの二元論のバリエーションとして考え、実現されたものの領野における創造の実践性を規定する理論としてドゥルーズの非美学を呈示することを試みる。

4,000 字以内

Must not exceed 4,000 Japanese characters or 1,600 words.